塩山中学校

「心豊かに，生きる力をはぐくむ教育の研究」

～集団を高めるための，個の育成を目指して～

Ⅰ　研究の内容

1　主題設定の理由

国の政策，県の政策を受け，地域に根差した教育を進めていくための甲州市の取り組み（平成２３年１０月に「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足）も８年目となる。４月９日の説明会において，今年度は第４次プロジェクトの２年目の位置づけであり，昨年度からの取り組みを定着させることを重点に置くことが確認された。

市のプロジェクトを視点としながら本校の現状を見てみると，プロジェクトの基盤となる「集団づくり」という点では，あいさつや生徒相互の支えあい（けが人などへの支援や当番活動の手伝い）、部活動などにおいて，さわやかな学校生活を送っている様子がうかがえる。またＱＵにおいても満足度群の割合が全国平均を上回っていることからも，落ち着いた学校であると客観的に見ることもできる。

別の視点として不登校生徒の様子を見てみると，３年前まで２％台だった長期欠席者が一昨年は５％，昨年は８％とここ数年増加傾向にある。また学力面においても，二極化の傾向が表れはじめている。

以上のことを踏まえ，今年度は「集団づくり」というこれまでの方針を受け継ぎつつ，集団を構成する生徒個々の力を少しずつ向上させるための研究を進めていくこととした。

2　研究の柱として

・生徒理解（市プロジェクトの「集団づくり」とリンクして）
・授業と家庭学習の連携（市プロジェクトの「授業づくり」や「保護者との連携」とリンクして）
・学習指導要領の実践（市のプロジェクトの「授業改善」とリンクして）

Ⅱ　研究の具体的内容と方法

1　<u>意欲的に学ぶ集団づくりについて</u>（継続実施することにより生徒を育てる活動として）

（１）QU アンケートを用いて，生徒の実態を把握する。

※　４／９市研究主任会にて　甲州市の学校は満足度群が多い。今年度も多いようであれば，集団から外れている特定の生徒に関して焦点を当て対策し，記録してみてはどうか。

（２）SST や SGE を用いた人間関係作りを進める。

<u>→検証の一つとして QU の満足度群の割合や長期欠席者数の割合の変化</u>

2　<u>授業づくりおよび授業改善</u>（学力向上に関わる取り組みとして）

（１）授業の構造化を主とし，板書計画や指導案作り，また QU 結果を取り入れた授業の検討・実践を積み重ねていく。

（２）一人一実践（ステップアップ授業）で検証するとともに，実践記録を残す。

（３）SUN の活用を検討する

※　今年度市のプロジェクトの中にも「スタンバイの時間」導入が提案されている。導入の意図としては，１日の授業の中で「このことはもう少し調べてみたいなあ」とか，「あそこがわからなかったからもう一度確認しておかないと」といった授業の復習を促し，授業内容の定着をはかることを目的としている。

本校での取り組みに照らし合わせてみると，SUT との関わりがある。なかなか家庭学習の題材が見つからない生徒に対しては，SUT の取り組みは一つの解決方法であるが，どちらかといえば，スタンバイの時間に「題材が見つからない」＝「今日の学習のポイントが見つからない（見つけられない）」生徒にこそ，復習を行わせたいと考える。今年度は市プロジェクトの方向性に合わせ，ＳＵＮについてはその日の授業の復習を中心に取り組ませるよう仕組んでいきたい。

①授業の中で家庭学習とつながる働きかけの方法と，②スタンバイの時間における振返り（課題設定）を大切に見ていきたい。

なおＳＮＴについては継続取り組みとしていくが，取り組み（テスト対策）方法を再検討したい。

→検証の一つとして，各種調査や検査の結果分析

３　研究授業の実施（指導力の向上を目指して）

（１）ＥＳＤに関する学習および研究授業

※　今後取り組まなくてはならないＥＤＳについての基本的な学習と共通理解を深めていく。

（２）道徳の実践および資料の構築

Ⅲ　成果と課題

１　年間を通じた集団づくりと個の育成について

・学校に届けられる地域などからの声や，教職員の日常的な観察からも，生徒の成長が感じられる。ＱＵを活用した集団づくりや個別指導，また生活規範や塩中魂をもとにした日常的な指導，行事での取組が一定の成果をもたらしている。

・一方教職員対象の校内研アンケートからは，『教職員は取組や働きかけを行っているが，必ずしも生徒一人ひとりに浸透しているとは言えない』状況がうかがえる。特に生活規範や塩中魂のすべての項目において，教職員からは「十分」とは言い難い現状（５０％を超える項目がないこと）は，これからの課題としてあげられる。

・生徒の一人ひとりの育成をより充実させるため，指導・支援するための時間をどのように作り出していくのかが継続課題の一つである。

２　年間を通じた授業改善やスタンバイの時間（新設），ＳＵＮの取組などについて

・学校評価の家庭学習に関する保護者の肯定率が昨年度より６～１０ポイント上昇したことは，生徒の家庭学習の取組姿勢がより良くなったことがうかがえる。

・新設したスタンバイの時間については，５０％を超える教職員が「１日の授業の振返りの時間となっていた」と回答しているが，ＳＵＮの内容につながっていないと感じている。

・『毎日の授業の復習を中心に，ＳＵＴの前日などはＳＵＴの学習をする』というパターンが多いようだが，一部の生徒については１年を通じて漢字や英単語だけという内容も見られる。

・今年度新設された「スタンバイの時間」を活用して，ステップアップノートの取組をより明確化するだけでなく，学びの集会における先輩からのアドバイスや生徒会活動に取り入れた活動を来年度以降も継続する必要がある。

・学力把握については，１学期末に提示した各学年のＮＲＴの推移データに新年度４月のデータを足し，考察することが必要である。

３　道徳およびＥＳＤに関する授業研究について

・「学年でワークシートや評価について共有することで，授業準備や評価が効率的にできた。」や「校内研で道徳の評価について取り上げていただいたので，通信表の評価の際に役立った。」という成果が得られたものの，資料選択の難しさ（時代背景に合わないものや古いと感じられるもの，また行事と関連した実施時期など）や評価方法については，来年度以降も検討を継続する必要性が感じられる。

・学習会を通して教職員のＥＳＤ（ＳＤＧｓ）に関する知識は得られた。それぞれの教科指導（授業）にどのように取り入れていくのか，また行事などでの位置づけについては，来年度以降の研究課題として引き継ぐこととなる。